懐かしき高校時代

岩井　英一（3組）

玉竜高校へ入学したのは昭和三十年四月、十五歳の時である。まだまだ幼く、世間知らずの私であった。

最初に思い出すのは「待ち伏せ」事件である。佐賀、宮元、入佐、岩井の四人の仲間は、学校帰りに、女生徒達と何か面白いことでも起きないかと、待ち伏せていたのである。隠れて「お前の彼女だ、話かけろ」とお互いにけしかけあった。しかし、誰もそれが出来た者はいなかった。

そのうちに仲間達に、家が近いから、中学校が同じだったからと、へ理屈をつけて彼女たちを割り当てた。クラスの女生徒は六人と少なく、彼女を作れそうにもない私は「まあ、いいか」と言う顔をしていた。

こうして勝手に自分の彼女を持つことが出来たのである。しかし、これは「かり（仮）ごと」であり、何も実るものはなく、心は虚しく、人に話せるようなことではないと、みんな自覚していた。

白状するけど、私はそれまで、女の子と話さえしたことはなかった。その私の彼女は、中学生の時、家が近くでクラスが同じで帰り道も同じだった。

彼女は、他の子と違ってときおり、カバンを大きく振り回し、スカートをふわっと広げたり、スキップしたりしながら帰っていた。

私は帰り道、会わないように追いつかないようにしていた。人目のない所で、そのしぐさを真似てみたりしていた。いつしかほのかに、いとおしさを覚えていたのだ。と、この時になって気付いたのである。

仲間たちも口には出さないが「かりごと」を楽しんでいるようすが伺えた。

ある日、南洲神社の下の通りで、待ち伏せていた。待っている間、自転車を道路脇に置いてふざけあっていたとき、四人とも犬の糞を踏んでしまい、強烈な悪臭が辺り一面にたちこめた。

風の流れもよどんでいて、鼻をつまんでも体に染み込んできそうだった。

何たることか、丁度そこへ彼女達が通りかかったのである。こんな雰囲気にしたのは、我々ではないと身を隠してじっと見ていた。

彼女達は悪臭たちこめる中を何事もなかったかの如く、悠然と通り過ぎて行ったのである。

そんなはずはない、「キャッ」とか「臭い」とか何等かのリアクションがあって然るべきだと期待していたのに――。

我々は気が抜けた。彼女達は我々よりもずっと大人で、犬の糞臭ぐらいで動じるはずもなかった。

成績も中学生の時から優秀で、私にとっては憧れ、いやマドンナに近い存在だった。こんなことを喜びとする自分達の幼さ、未熟さを思い知らされた事件であった。

体育祭のダンスの練習で、順番に廻って来る彼女達、四人それぞれどんな顔をして彼女と手を繋いでいるか、お互い観察し合って後で冷やかすのであった。

「下ばっかい向いて顔も上げんかったな」「いっちょん手も繋がんかったな」等と冷やかしたり「ちょっち何か話しをしちょったな、何いを話しとったんや」と問い詰めたりしたのである。

仲間だけでなく、あっちこっちで、おなじような会話があったであろう。何とも幼く、ラブレターらしきものを書くようなこともなく、無粋な青春時代であった。

入学して直ぐ「柔道部」に入った。しかし練習はいつも受け身が多く、乱取りでは、筋むき先輩たちに投げられるばかりで、技は殆んど教えてもらえなかった。

体を鍛えるだけではなく、技を学びたかったのである。半年も続かず止めてしまった。

でも何かものたりなくて、砂場で羽生と、時には日高と相撲を取った。如何に相手の力を利用するかと二人で研究した。授業があるのも忘れて、そのままさぼってしまったこともあった。

二年になると、校舎のつなぎ目の所で相撲を取っている者がいつも五、六人はいた。羽生との研究の成果もあって、私は足技が冴えて体格のよい者にもよく勝った。

仲間うちで、入佐が栃錦、私は千代の山で、若乃花は伊地知だったろうか。何故こんな風に決めてかかるのか、まだ、子供心から抜け切れていなかったのだろう。

「水泳」の授業は、プールがまだ無く、磯で行われていた。もちろん男女は別々の時間帯に分かれるのである。

女子の時には、少し離れたぢゃんぼ餅屋の横に隠れて、ぢゃんぼ餅をねぶりながら「おっど、おっど、あそこにお前の彼女が」と、ふだん見ることのない情景に目を輝かせながら冷やかしあって楽しんでいた。

そのふざけ心が男子の番になっても続いたのか、我々はあまり真面目には取り組んでいなかったのである。

「早飯」は二時限か三時限の休憩時間である。校舎の裏の塀を乗り越え、福昌寺跡の墓地で弁当を開いた。食べる時間は短く、まるで、早食い競争であった。

ある日、弁当を取りに自分の机に戻ってみると、弁当は誰かに食われていた。早食いのプロにやられたのだ。聞いていたので、用心はしていたのだが、その後もしてやられた。犯人を教えてくれる者はなく、探すこともなく諦めたのであった。

早飯は強がりの表現か、昼まで待てないのか、いや、やっぱり授業でエネルギーを費やし、腹が減っていたのだ。自分がそうであったのだから。

「帽子」はよく教室の窓から外に投げ落とされていた。これくらいの悪ふざけは年中のことで、その場の雰囲気によっては、誰彼かまわず皆でやってしまう事もあった。

こんな事も二年、三年になるとだんだん少なくなった。ばかばかしくなっていったのだろう。少しずつ大人になっていったのである。

あの白線が二本入った、△の形の中にぎょく「玉」ではなく「高」の字を燃えるかの如くかたどった記章の帽子である。何か誇りとか、今の「カッコイイ」を感じていたのかも知れない。

「野球」が強いわれらが母校であった。準決勝、決勝になると、授業は中止となって、鴨池球場まで応援に行った。

甲子園出場をかけた鹿商、出水商との戦いには力が入った。「みんなみの空晴れわたり黒潮の・・・」とスタンドで大声を張り上げた。

当時、女生徒のチアダンスなどあったらなぁと思うと、この歳になっても楽しくなる。

強いのは野球ばかりではなく、ラグビーも強かった。これも玉竜の伝統になっていった。体育の時間にはサッカーもあったが、みんなが希望してラグビーになることが多かった。

パスやタックルの練習などもよくやった。前パスはペナルティなので、左手を前方に、右手を十分に左側へ引いて、真横から後ろの方へパスするのである。これは右へのパスの場合で、左へはこの逆である。今でもラグビーボールを手にすると、そんなしぐさをしたくなる。

二つのチームに分かれての試合で、楕円のボールの転がりの変化、全力をかけてのタックルは楽しかった。悪げはないのだが、あいつに強烈なタックルをかけて倒してやろうと狙ったりしていた。

早慶戦、早明戦、新日鉄釜石、神戸製鋼など卒業してからも楽しめた。

バスケットは、女子が強かったと思う。体育館で女子の試合を見ていて、ボールの奪い合いは凄まじく、女性のイメージと合わず、幻滅を感じてから好きにはなれなかった。幸いにこの中にマドンナたちは、いなかったのである。

「遠泳」には二年のとき参加した。桜島から磯迄である。

中学の時から磯へ一人で泳ぎに行っていた私は、沖へ出て、潮に流され危険を感じたこともあったが「錦江湾ぐらい俺だって泳げるわい」と云う根拠なき自負があった。

ただ「錦江湾にはやイルカやサメがいるから、昔から赤兵児を長く流しながら泳ぐものだ」と聞いていた。

当時、イルカはサメの一種ぐらいのイメージしかなく、サメへの恐怖は二倍であった。でも赤兵児をする勇気はなかった。だいぶ怖い思いをしながらも泳ぎきった。

桜島から泳ぎ始めると、驚くべきことに、磯から一人で泳いで来た者がいた。それは宮元であった。彼はそのまま加わり一緒に引返したのである。

どこか無鉄砲なところのある彼は、バーバリー（バーバリアン＝野蛮人）の渾名があったが、まさしく彼の本領を発揮した快挙とも言うべき事だった。

そして「ぼっけもん」とも呼ばれるようにもなったのである。いや、野蛮人から昇格したのだ。

陸の方では、毎年、十キロだったと思うが持久走があった。坂道もあり、歩きもしたが、何とかゴールしたのはいつも制限時間を超えて、すべて終わって誰もいない校庭だった。

苦痛をこらえ完走したのに、認めてくれる者がいないのだから、全く空しい思いであった。いま思うに「遠泳」参加はこの時の反動であったのか?意地であったのだろうか?

ある時、女生徒達の話声が聞こえてきた。聞き耳を立てると、英語の歌に関する事で、どうもペテロ先生が教えそうな歌ではなかった。

学校から帰ると母はいつもラジオで「城山すずめ」を聞いていた。流れてくる歌は「月がとっても青いから」「君の名は」「落ち葉しぐれ」などの流行歌である。そんな歌しか知らない私には、全く別の世界があるようであった。

その後だいぶ経ってからのことで、あれはラブミーテンダー、エルヴィスプレスリーの話だったのだと分かった。話題についていけない世間知らずであったのだ。

歌謡曲も裾野が広がっていく前であり、メディアの発達もこれからで、ラジオとレコードの時代である。歌謡曲に疎いのは自分だけではなかったはずだ、と思いたいのだが――。

テレビの普及率はまだ低く、我が家にも無く、娯楽はもっぱら映画であった。
映画はチャンバラを卒業して、日活よりも西部劇であった。二番煎じの映画で入場料は二百円かそれぐらいで安く、いつでも時間さえあれば観に行けた。
いつだったか「女はそれを我慢できない」と言う映画が来た。何を我慢出来ないのか気になって観たかったが、あやしげな映画に思えて、高校生で見に行っていいものか人に聞いたら笑われそうで、一人で悩んで結局行かずじまいであった。
友達の間では話題に上がらなかった。私は女性に意識過剰であったのか?いや同級生で見にいった者がいたはずだ。バーバリーは行かなかったのか?仲間にも聞けないぐらいシャイであったのだ。

ある日「小論文を書いて提出しなさい、体育の単位取得にも影響する」と門内先生から言われた。
作文は苦手だった。国語でもないのにと反発し、ふてくされて「ええいくそ!とばかり「回虫」を題名にして、ええかげんな理屈をこね回し提出した。そこには、不真面目でふざけた性格が現れていた。
門内先生にいつ呼び出されるかと先生の反応が気になっていたが、そのうちに、まともに受け止め、認めて頂いていたことが分かった。それからよく冗談を言い、何でも気軽に話せるようになった。シャイな自分にも少し勇気も出てきたのである。
今、その時の「回虫」を読んでみたいものだが、そんな「こもんじょ」残っているはずもない。

「趣味は?」の問いに、あまり読みもしないのに、いつも「読書」であった。
でも天文館の「金海堂」にはよく行った。目的の本を探した後、少しエッチな本が目に入ると、気になって周りに先生や友達がいないか確かめてから、その妖しげな雑誌を素早くめくった。
キョロキョロしていたので、万引きではないかと監視されていたかもしれない。見ないで帰った時は、気になって落ち着かなかった。
そんな本は図書室にあるはずもなかった。しかし、吉川英治の三国志はよく読んだ。読み出したら夜中までやめられなかった。
大らかな劉備玄徳、武勇を誇る関羽、張飛、三顧の礼で迎えた諸葛孔明等の人物像、雄大な国土の中で、赤壁の戦い等戦略戦術を駆使しての戦いは面白かった。
これが歴史好きのきっかけになったのだろう。今は、韓流歴史ドラマをよく見る。
「モーラ」（なにー、なんだと）「ペーハー」（殿下、殿）等の言葉は覚えてしまった。

朝鮮史も年代的にほぼ日本の歴史と横並びである。しかし今の北朝鮮は、王朝歴史ドラマの中から現代服を着て出て来たかのようである。世界を相手にその言動にはこちらが「モーラ」と言いたくなる。
「授業」では、酒匂先生の日本史は好きだった。面白く、興味深く学んだ。
今は、中国史、朝鮮史、そして世界史はスルーして、一三七億年前から始まる宇宙史、四六億年前から始まる太陽系地球史に興味をそそがれる。白亜紀、ジュラ紀、三畳紀の恐竜の化石は一度、大博物館に行って見てみたい。

数学、英語は初めから難しかった。竹の根で出来た指棒で、鞭の如く、ビシッ、ビシッとズボンに打ちつけ音を響かせる小迫先生、低音の安楽先生、鞭とドスの効いた声に、いつも恐竜ではないのだが、恐怖で震えていた。国語には興味を持てず、何も思い出せない。
優しかったのは、生物の今村先生をはじめ、ほかの先生方だった。その時間になると水泳の息継ぎの如くほっと息をついた。

「灰色の高校時代」と、時々耳にしてきたが、晴天と曇天が交互に出て来ただけのことである。あたり前の事であったのである。
私は硬軟ある授業の中で「かり（仮）ごと」達と、厳しくても楽しさもある三年間を過ごしたのであった。
あれから半世紀、もう遠い昔のできごとになってしまった。世の中は移り変わり、私もあの頃の写真とは結びつかないほどに変わってしまった。

懐かしき仲間たち、マドンナたちは、今どうしているのだろう――。
（当時に還ったつもりで書きましたので、いろいろ失礼や記憶違いがありますのをお許し下さい）